

---

# じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなが人権文化まちづくり協会  
第70号（2021年4月）

---



## 目次

報告「映画で見るレイシズム」	3
報告「被差別部落と多文化共生」	15
座談会「『安心・自信・自由』を届けるC A P事業」	26
「2020年度を振り返って」	33
「INFORMATION」	34
編集後記	35

## 【猪名川自然林公園】

桜の写真が撮りたくて、次女を保育園まで自転車で送り届けた後、豊中と尼崎の境目の公園まで再び自転車を走らせました。

猪名川自然林公園の桜は、既に満開の時期を過ぎ、散り始めていたため、なかなか期待通りの写真は撮れませんでした。日課のウォーキングやストレッチに勤しんでいる高齢者の姿がみてとれました。コロナの前はもっとたくさんの人で賑わっていたはずだろうと思うと寂しい気持ちになりました。

昨年4月、お弁当とビールを持って子どもたちとこの公園に来た時は、「ここでお弁当を食べないでください」とピクニック禁止令の張り紙が出されてきました。張り紙に気づかないフリをして1本だけ飲んで帰宅。家のなかにテントを広げて子どもたちと続きを愉しましました。

見えないウイルスに不安を感じるのは致し方ありませんが、不必要に恐れることは差別や偏見を助長しかねません。氾濫する情報に振り回されず、正しく学び、自分で考えることがやはり大事なのではないでしょうか。



濱元伸彦さん

「これからの人権教育を考える」



宮前千雅子さん

「部落問題の今とこれからの人権教育」

## ◇ お知らせ ◇

紙幅の関係で掲載しきれなかった宮前千雅子さんと濱元伸彦さんの講座要旨をホームページに掲載させていただきました。スマートフォンをお持ちの方は左のQRコードを読み込んでいただくと報告のページにアクセスできますので、ぜひご覧ください。パソコンから閲覧される方はトップページの「参加する」から当該ページに進むことができます。PDFでもご覧いただけます。

人権文化まちづくり講座

## 映画でみるレイシズム ～ Black Lives Matter ～

お話：中村一成<sup>いるそん</sup>さん（フリージャーナリスト）

10月24日はフリージャーナリストの中村一成さんをお招きして、「映画でみるレイシズム」をテーマに2時間みっちりご講演いただきました。このテーマでの講演依頼は少ないとおっしゃっていましたが、やはりレイシズムの問題に対して市民の関心が薄いのではないかと思いました。

本原稿は、当日お話いただいた内容を中村さんが更に加筆してくれました。「Black Lives Matter」とは何かということを直球ストレートに訴えかけてくれる報告をお楽しみください。（文責：森山輝子）

今日の演題は「映画でみるレイシズム」。これは『月刊ヒューマンライツ』（「部落解放・人権研究所」刊）でもう十年続けている連載「映画を通して考えるもう一つの世界」という連載の副題です。そもそもは廃刊になった雑誌『解放教育』で書いていた「映画をみる、映画でみる」の媒体を変えた続編です。ポイントは「を」と「で」にあります。泣いたり笑ったり、びっくりしたりドキドキしたりの一時間半や二時間を楽しみ、劇場を出たらすべて忘れるのも映画の「楽しみ方」でしょうが、私の狙いは映画を通した内面の耕作です。貧困や刑罰、犯罪など作家たちが向き合った社会問題の数々、人と人が作る社会で起きる、普段は見えない、あるいは見ずに済ませている難しい問題に

ついて、映画を通して知り、学び、考え、自分たちの社会に接続する。その難しい問題の一つが差別、今回のテーマに即して言えばレイシズムの問題なのです。換言

すれば映画や文学、芝居などの虚構——ドキュメンタリーも現実を「素材」にした作家の創作物です——とは、一面においてその為の発明でもあるわけです。なぜ虚構なのか。ドキュメンタリー監督である想田和弘さんの言葉を借りれば「私たちは虚構を通じてしか



「映画でみる移民/難民/レイシズム」影書房



リアルを認識できない」からです。

もう一ついえば、不公正、不公平な社会を堅持しようとする権力者や、マス・メディアなどの追従者たちは、この社会に存在する問題を覆い隠し、現実にあることをないことにしようとするからです。それを想像力で暴き出し、広く問題提起するのも作家の役割でしょう。日本の表現風土をぜひこの観点から考え欲しいと思います。私のテーマでいえば外国人を取り巻く状況や死刑問題でも、物語を盛り上げる素材として持ち出されて消費されることはあっても、そこに真摯に向き合い、自律した芸術表現にまで高めた作品が如何に少ないか。

今回は自著『映画でみる移民、難民、レイシズム』の第四章「血と暴力の国から」に焦点を当てつつ、本では触れなかった幾つかの映画も紹介しつつお話しします。不穏な題と思われるかもしれませんが、米国のミステリー作家コーマック・マッカーシーの書いた小説のタイトルです（ハヤカワ文庫）。これは『ノー・カントリー』（07年、コーエン兄弟）の題名で映画化されています。タイトルは小説、映画ともアメリカ合衆国を指しています。

白人入植者が大陸に上陸して以降、この国の歴史は白人キリスト教徒による暴力に「血塗られて」きました。先住民の虐殺と追放、黒人奴隷への絶え間ない暴力——これはいまでも黒人や有色人種を的にしたとしか思えない刑務所への大量服役政策として続いています——、そして、「ジャップ」を主たる敵とし、無差別空爆や原爆投下までの第二次大戦、朝鮮、ベトナムでの戦争。取り巻き国家を従えてのアフガニスタンやイラクへの侵略——宣戦布告でもない空爆を加えればそれはさらに増えるし、ほぼ全てイスラーム圏です——など、その本質は「血と暴力」だったことを示したものです。ちなみに概ねすべての戦争が有色人種や非・キリスト教徒が多数者の国でなされたことも注目してください。

これらは今日の演題にある“Black Lives Matter”にも直結する問題意識です。ちなみに『ノー・カントリー』の原題は、トミー・リー・ジョーンズ扮する保安官が、ある凄惨な事件を経た後に呟く言葉“*No Country for Old Men*”、（老いぼれの国じゃない）、に由来してますけど、コーエン兄弟の思いは、タイトルから“*Old*”を抜いたところにあるのではないかと私は思っています。“*No Country for Men*”、「人間の国じゃない」、と。

## レイシズムとは何か

映画の話に入る前にレイシズムを定義します。新聞記事などでは丸括弧を付けて（人種差別）とか「人種差別主

義」とかいいますが、不十分です。それは力であり力学です。アルベール・メンミというチュニジア出身のユダヤ人による定義を引いてみましょう。彼は端的にこう言っています。不公正・不公平な社会を構築・維持するために、多数者が他者との間に何かしらの違いを発見し、なければ捏造し、ある「人種」集団を立ち上げ、「人種差別」する。これをレイシズムというのだと。ポイントは違いがあるから差別するのではなく、特定集団を貶め、低位な状態を強いるために違いを見つけるということ。部落差別もまさにその例だと思います。人種にして差別する。そこまで踏まえた「人種差別主義」です。

では「人種差別」とは？ その国際的な定義は、国連の人種差別撤廃条約です。国連の人権条約では最も早い時期、1965年に採択されました。二度の戦争を経て、人種差別というものがいかに危険なものであるか、レイシズムがいかに危険なのかを一定程度理解したことがこの早さに繋がっています。言い換えるならば国連はこれを歴史的「使命」としていたのです。条文でまずみてほしいのは人種・皮膚の色だけではないということ、文化的な要素である民族差別や、社会的出身、種族的出身に基づくあらゆる区別・排除・制限などを含んでいます。ナチスが骨相学などを用いてユダヤ人を「自分たち」と立て分けようとしたことはよく知られていますが、そもそも遺伝学的には黒人、白人、黄色人種の間には「違い」というべき「違い」などありません。

いささか乱暴に聞こえるかもしれませんが、「人種」など存在しない、ただ誰かを貶め、「何をしても構わない」、「どんな目に遭わせてもいい」存在にするための「人種化」だけがある。だからこそ民族や社会的出身の違いまで持ち込んで差別するわけです。条約加入時、日本政府は対象として在日とアイヌしか認めていませんでしたが、国際的に言えば部落差別も沖縄人差別も対象です。

## レイシズムが可能にすること ～奴隷制、植民地支配、戦争、虐殺

このレイシズムは根絶すべき絶対悪です。なぜか？ 奴隷制・植民地支配・戦争・虐殺・一般犯罪の思想的資源になるからです。異教徒らが同じ人間と認識された近代以降において、なお同じ人を人以下に扱うための思想的な資源、土台がレイシズムでした。

キリスト教、ドミニコ会の宣教師、ラス・カサスが書いた『インディアスの破壊についての簡潔な報告』という古典が一つの例です。新大陸に渡ったスペイン人



たちが現地のインディオたちを家畜以下に扱い、数万人単位で殺戮している実態を国王に報告した書です。ラス・カサス自身も「文明化の使命」に燃えて新大陸への侵略——彼の認識は侵略ではなかったのでしょうか——に同行していたわけですが、「同胞」であるスペイン人たちの現地での蛮行が「蛮」の域すら超えていると気づき、告発に踏み切ったのです。厳密に言えばこれはスペイン人が中南米の人たちを同じ生き物として見ていなかった16世紀初頭の書物ですから、今でいうレイシズム概念をそのまま当てはめることには無理がありますが、とにかく、同じ人間と見做さなければ人は平気で残虐行為が出来るのです。

ちなみにこれらの植民地主義、すなわち他者の土地を侵略し、収奪する行為がレイシズムを生み、全世界に頒布したといわれます。人を人と思えば出来ない蛮行を下支えする思想的資源として生まれ、人を人と思わない行為が全世界に撒き散らしたわけです。レイシズムがもたらした破局はいくらでもありますし、それを描いた映画も数限りなくあります。

たとえばナチス・ドイツのユダヤ人虐殺を描いた作品群は典型でしょう。玉石混交なのは当然ですが、二度と繰り返してはいけないという作家の志を感じさせます。絶対悪としてナチスやヒトラーを描くだけでなく、自らを切開する作品も出ています。ヒトラーを「人間」として描き、物議をかもした『ヒトラー最期の12日』（04年、オリ

ヴァー・ヒルシュビーゲル）などは、彼らを「異常な絶対悪」として描く在り様——これもやらないより意味はあります——から踏み込み、ナチスの暴虐を支えた「国民責任」を問うた一本です。

欧州諸国でも「被害者」の側面ではなく、刃を自らに向け、自国の恥、加害責任を問う作品が生れています。たとえば共に2010年に制作されたフランス映画『サラの鍵』（ジル・パケ・ブレネール）と『黄色い星の子共たち』（ローズ・ボッシュ）は、ナチス占領時代のフランス・ヴィシー政権がナチスに便乗し、国内ユダヤ人を弾圧した責任を真正面から描いています。2015年のデンマーク映画『ヒトラーの忘れもの』（マーチン・ピータ・サンフリト）では、捕虜にしたドイツの少年兵を終戦しても解放せず、海岸線の地雷撤去に動員した事実を抉っています。人間探知機です。ロクな装備もない中での地雷探査では犠牲者や手足を失う者が続出しました。端的に言えば少年相手に陰惨な報復をした「恥」です。

では日本はどうでしょうか。最近





だと関東大震災での朝鮮人虐殺を描いた『金子文子と朴烈』(17年、イ・ジュンイク)、植民地朝鮮での皇民化政策の暴力を描

いた『マルモイ』。(20年、オム・ユナ)いずれも韓国映画です。なぜこれらの歴史的犯罪を「日本の映画」として観れないのでしょうか。もちろん今回、取り上げる米国映画にも単なる悲惨の消費や、本質的には白人の自己満足であり、白人優越主義の補強に他ならない白人救世主もの——黒人の苦境を白人が救う類で、S・スピルバーグの『アミスタッド』などは典型——も少なくないですが、米国で黒人差別を扱った映画が常につくり出されるのも、D・トランプが大統領になるほど根深い人種差別に対峙する作家の「否」を感じるわけです。それは後述するBLM運動が奴隷制、植民地主義の歴史を射程に収めていることとも通じています。

### ヘイトクライムの3類型

最後にレイシズムが生む一般犯罪、いわゆる暴行や傷害、レイプや殺人などについて説明します。それはヘイトクライムと呼ばれます。たとえば『アメリカンヒストリーX』(1998年、トニー・ケイ)などレイシストを描いた

映画の中ではよく出て来る概念です。ヘイトスピーチを「憎悪表現」とするメディアが少なくないように——「差別煽動」や「差別扇動表現」と意識しないと「差別を煽る行為」という害悪、危険性が見えなくなってしまう——、「憎悪犯罪」と直訳されたりしますが、「差別的動機に基づく犯罪」が正確な意味です。諸外国では犯罪類型化されていて、一般的動機の犯罪より量刑が重くなる。この社会との認識の差にクラクラします。5・7・5の人権俳句を貼りだすことが「人権擁護」活動だとされている国で、差別とは「心の問題」と認識されがちですが、認識が甘すぎる。差別とはそれ自体が暴力であり、その暴力は必ず、より過激になっていくのです。

先の人種差別撤廃条約と同じく、人種差別、レイシズムが如何に社会を壊す絶対悪かを踏まえているからこそその厳罰なのですが、日本では法的類型はありません。実はこの件でも日本は国連の人種差別撤廃委から改善を指摘されていて、日本政府はそのたびに動機の差別性は量刑に反映されると答弁しているのですが、でも京都の朝鮮学校襲撃事件など在日本への差別が明示的に量刑に繋がった例はありません。日本政府は嘘を言っているのです。

さて、このヘイトクライムには大きく三類型があります。一つは「スリル追求型」。他人に身体・精神的苦痛を味わわせるスリルを目的とするものです。二番目は反応型。「自分の世界」と信じている縄張りに他者が侵入する

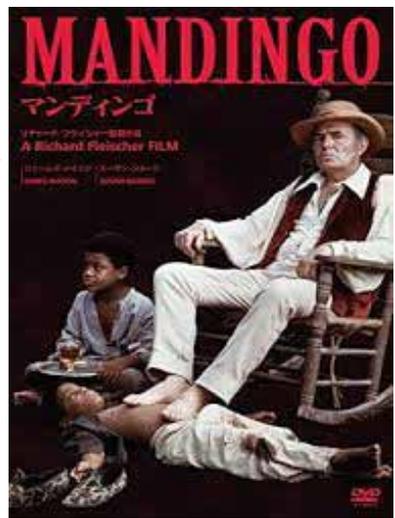
ことへの拒絶反応です。米国で南北戦争が終わって形式上、奴隷が解放されるといわゆるクー・クラックス・クラン（KKK）運動が高揚し、権利を主張する「生意気な黒人」をリンチしたのは典型です。日本では賤民廃止令が出た後、部落民が自分たちと「対等」になることへの反発が起きて暴力となります。岡山の美作での虐殺や福岡でのムラ焼き討ちなどが知られています。1997年には愛知県小牧市で当時14歳だった「日系ブラジル人」少年が、二十数人の日本人少年にバットやナイフでなぶり殺しにされた「エルクラノ事件」が起きました。それから在特会に代表される在日へのヘイトスピーチも、在日の制度的差別が幾つか「改善」され権利状況が徐々に「国民」に近づいたことへの反発が根底にあると思います。エリアだけでなく社会階層も含むということです。

最後が使命型です。特定の属性を持つ人の排除や抹殺を自らの使命と捉えての犯罪です。典型は米国でモスクなどに乱入して銃を乱射する類の犯罪です。このタイプの犯人は、手あたり次第に対象を殺した後、最後は自殺したりするケースが少なくない。アメリカのヘイトクライム研究では、この使命型が、最も矯正困難だと言われています。

さて、映画に入ります。まず1975年の米国映画『マンディンゴ』（リチャード・フライシャー）です。南部での奴隷農場を舞台にした嫉妬と憎し

みの人間ドラマで、カイル・オンストットの長編小説が原作です。時代は南北戦争から20年ほど前だと推察されます。欧州での奴隷貿易、奴隷制廃止の流れに沿う形で、独立戦争以後、米国の北部では徐々に奴隷解放が進み、既に奴隷貿易それ自体はアメリカ全土で禁止されていました。

では最後まで奴隷制に執着していた南部で何がなされていたか。今いる奴隷に子どもを産ませて、南部のプランテーション農家に「販売」したり、欧州に「密輸出」して稼いでいたのです。黒人奴隷同士を「交配」させるのはもちろん、「ご主人様」が奴隷をレイプして子どもを産ませるケースが非常に多かったといえます。前述した『インディアスの破壊に対する簡潔な報告』でも出てきますが、スペインの人間が中南米から奴隷を連れてくるときに、妊娠している方が高く売れるということで、スペイン人がインディオ女性を集団でレイプし続けたことが指摘されています。アフリカ系米国人が自らの家系を辿ると、白人奴隷主から性暴力を受けた人がいるケースが非常に多いことはよく指摘されている。白



人の血が入った黒人の方が高い値がついたことも、この蛮行を後押ししたといわれます。

## 映画『マンディンゴ』～映画史上の「名作」への批判～

ちなみにこの作品は『風と共に去りぬ』(1939年、ヴィクター・フレミング)への明け透けな批判としてつくられています。御承知の方も多いと思いますが、あの作品の差別性は1939年の公開当時から指摘されていました。「古き良き南部」と礼賛されているのは、奴隷制という「人道に対する罪」が継続していた時代です。端的に言えば『風と共に去りぬ』は奴隷制肯定が大前提なのです。だから登場する奴隷は、血の一滴まで白人に仕えることを幸せとする者か、悪に染まり易い存在、嘘つきやワルだったりします。その差別性は原作ではより明白です。地の文でも「Nigger (クロンボ)」が連発されるし、黒人を劣なる存在とする記述が頻出します。登場人物の少なからぬ者がKKKのメンバーですし、私刑による黒人青年虐殺を賛美するくだりすらある。マーガレット・ミッチェル自体、レイシストだったのです。

『マンディンゴ』はその世界観へのまったき否です。劇場公開時のポスターも、スカーレット・オハラとレッド・バトラーが抱き合う構図を登場人物、すなわち白人と黒人に置き換えてつくっています。とりわけ黒人男性が白人女性を抱きしめてキスしようとす

る構図は、白人社会をかなり刺激するものだったようです。監督自身も『風と共に去りぬ』を批判し、嘘ばかり描くから俺はこう描いたんだ、などと毒づいています。

BLM運動の高まりとともに、米国の動画配信サービスが「風と共に去りぬ」の配信をストップしたという報道をご存知の方も多いと思います。結局は作品の問題点を指摘したうえで、4分半ほどの動画を本編開始前に付ける形で動画配信を再開しました。私もただ消して、観れなくしてしまうのはよくないと思います。なかったことにしてしまうのは、何が問題でどうするのかの道筋を消してしまう。いわば「日本的謝罪」であり、私は是としません。議論がなければまた繰り返すだけです。いずれにせよ20世紀のアメリカ映画をテーマにアンケートを取れば、この映画は米国映画史上のナンバーワンや、5位以内に選ばれる作品でした。BLM運動の高揚はその差別性を射抜くまでに至っているということです。

映画は最近、やっとDVDになったのでぜひ観て欲しいのですけど——最近まで出なかったのも本作が映画史上のタブーだったからとの説があります——、没落する奴隷農場を経営する父子がひとまずの主人公です。父親の意志で息子は知り合いの女性と結婚するのですが、あることで不信感を抱き、彼はお気に入りの黒人奴隷との性愛にのめり込みます。寂しさと怒りから妻も黒人奴隷の男性を誘惑し……というドロドロの話です。

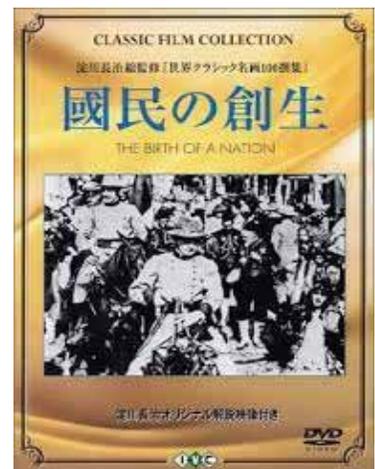
一方で映画『マンディンゴ』には、原作にはない黒人奴隷の叛乱のシーンが盛り込まれています。そもそも原作には、自らの尊厳のために闘う黒人は出てこない。黒人奴隷による武装蜂起「ナット・ターナーの乱」（1831年）が噂として語られるだけです。当時、反乱とは命を賭すこと。ナット・ターナーの乱も鎮圧され、彼は吊るし首にされた拳銃、全身の皮を剥がれて八つ裂きにされました。「戦利品」として部位を持ち帰る者もいた。それでも人は立ち上がる。人間が人間である限り、自由と尊厳を求めるからです。オンストットには黒人が自らの解放の主体となることを想像できなかったのだと思います。前述した白人救世主物にも通じるイマジネーションの限界です。現実を想像力で越えられなかったのです。彼はこれ以外、目立った作品——これ自体、小説としては破綻してますが——を遺していない理由もここにあるのでしょうか。彼は作家ではなかったのだと思う。それが映画の「マンディンゴ」ではかなり作り替えられているのです。公民権運動を経た時代の空気もあったのですが。小説から映画に移行する課程での変化はそれ自体、とても興味深いものです。

### 稀代の差別映画『国民の創生』

もう一つ取り上げます。前述したように、南北戦争で北軍が勝利し、形式的にですが奴隷制が廃止されます——この後も現在まで続く奴隷制の実態に

ついては、ネットフリックスで配信されている『13th 憲法修正第13条』（16年、エイヴァ・デュバーネイ）を是非観てください。その後、KKK（クー・クラックス・クラン）ら白人至上主義者の活動が活発化します。先に述べました「侵入型ヘイトクライム」です。彼らは北軍、ひいては統一米国自体の脅威と見做され攻撃され、世紀を跨ぎ事実上消滅します。そんな白人至上主義者らをエンパワーし、いわば「第二次KKK」の発足をもたらした作品『国民の創生』（1915年、D・W・グリフィス）です。映画評論家の故・淀川長治さんが選定したDVDシリーズ「世界クラシック名映画100選」にも入っている米国映画史上の「古典」とされます。一つは技法上の革新性です。そもそも世界初の長編ですから演劇に固定カメラを向けるようなそれまでのスタイルでは間が持たない。勢い技法を工夫することになる。クローズアップでの心理描写や台車にカメラ乗せたドリー撮影などを初めてやったのです。現在の撮影技法の少なからぬものが本作にある。その意味では間違いなく教科書だった。

もう一つは南部のレイシストをエンパワー



した差別映画の「古典」としての位置づけです。南北戦争で北軍が掲げた奴隷制の廃止に対して、この映画は一貫した立場をとります。それは、北部権力と結託しニガー（奴隷解放論者も南部の奴隷主義者には「クロンボ（ニガー）なんです」）が、黒人を優遇する世界を創り出そうとしているとの認識です。黒人が白人と「対等になる」ことが、本作では許し難い問題なんです。

南軍は破れ、「平等」を主張する解放奴隷たちの「横暴」に白人が苦しみます。悩む主人公がある日、観たのが白人の子どもが白い布を被って黒人の子どもたちを怖がらせる場面を観ます。ここからインスピレーションを得たのがKKKの白装束です。KKKといえば思い浮かぶと思いますが、あのイカみみたいな白装束は、この映画のアイデアなんです。もう一つ言えば十字架燃やしの脅迫もこの映画です。

そして主人公はKKKを結成し、「悪い黒人たち」を成敗していきます。「白人たちのピンチを救うために正義のKKKが大活躍する」という話。白人女性に求婚した黒人青年に対する私刑もカタルシスとして描かれます。まごう



ことなき差別映画の古典です。

前述したように公開時から抗議や上映禁止を求める声があったのですが、それらの声は無視され、大ヒットを記録しました。米国大統領がホワイトハウス（最高権力者の住まいの名は「白い」家です！）で上映会を開き「この映画には真実の歴史がある」と言ったそうですから。少なからぬ白人の「言いたくても言えない」本音がこの映画にあったのです。これを見て感動した一人がアトランタの牧師、ウィリアム・シモンズでした。彼は地元の岩山で神の啓示を受けたと主張し、KKKを再建するわけです。まさにこの映画が原動力でした。

それが今まで続いています。2017年7月のシャーロットビルもその一つでした。トランプの大統領就任を寿ぐ差別排外主義者たちが全米から彼の地に終結し、大集会を開いた。そこでカウンターが結集して抗議デモをしたらレイシストの運転する車が突っ込み、ヘザー・D・ハイヤーさん（当時32才）がひき殺されました。跳ね飛ばされて大怪我をした人も複数いましたが、トランプ氏は最初、いわゆる「どっちもどっち」的発言をしていた。これはレイシストの常套句です。当時の写真はネット上で幾らでも検索できます。目を引くのが、イカみみたいな衣装をした人たちが顔出しをしていることです。これは深刻です。多人種、多文化の国ゆえに、理念、建前を大事にする側面が米国にはあります。その一つが差別はダメだということです。プロバ

スケッチボールチームのオーナーが差別発言で追放されたり、ハーバード大学の合格者10人ほどがSNSで差別発言をしたことで内定を取り消されたり、プロレスラーのハルク・ホーガンが差別発言でプロレス団体を解雇されたり、差別発言が社会的生命にかかわる「伝統」は存在していた。それが揺らいでいることの象徴です。

レイシストでセクシスト、金満家、あのような人物が大統領になったことが、封じ込められていた差別排外主義者たちを後押ししているということ。彼らは「俺たちはメインストリームなんだ。胸を張っていいんだ」と我が世の春を謳歌しているのです。私の経験でも思い当たる場所がある。例えば石原慎太郎さん。最近「業病」発言で物議を醸した彼は、都知事だった2000年、自衛隊駐屯地の式典に出席し、挨拶で騒乱時に「三国人」が騒ぎを起こすかもしれない。その時は出動をよろしくとの趣旨の発言をした。三国人とは、米国人と同義の占領軍人でも日本人でもない「第三」国の者たち。旧植民地出身者たる朝鮮人、台湾人への蔑称です。私は当時新聞記者でした。一貫してマイノリティの問題を書いていたので誹謗中傷は多かったけど、90年代は匿名が原則でした。でも三国人発言以降、実名や住所を出して抗議する人が明らかに増えた。公人の差別は人種差別撤廃条約でも優先的な規制対象です。条約の差別禁止（≒犯罪化）については「言論の自由」などと言って留保している日本政府も、公による

差別の禁止は留保していません。でも何もしないのですね。まさにヘイト政府ゆえですが、これが民間の差別主義者を勢い付けているのです。

## 現代的レイシズムに対抗する『ブラック・クランズマン』

さて、この稀代の差別映画『国民の創生』を正面から批判する映画も何本かつくられています。その一本がスパイク・リーの2018年作品『ブラック・クランズマン』です。70年代、KKKが敵視対するマイノリティ、黒人とユダヤ人の刑事が潜入捜査をするという話です。コロラド州コロラドスプリングスの警察署にアフリカ系として初めて採用されたロン・ストールワースの手記を入口にしたエンターテインメント作品です。

奴隷制は1865年、形式的には廃止されましたけど、「ジム・クロウ法」体制といわれる公共空間での黒人と白人の分離、すなわちアパルトヘイトや、事前登録や資格審査などを巧妙に利用したアフリカ系住民の参政権剥奪は続きました。一方で黒人当事者からの「否」が1950年代以降、前景化していきます。それが公民権運動です。運動が「一段落」した後の70年代、ノンポリの黒人青年、ロン・ストールワースが地元警察署に採用されます。最初はその属性を「活かした」黒人解放運動への潜入捜査を担っていた彼ですが、後ろめたさからかKKKへの潜入捜査を始めます。「事実」はここまで。

後はスパイク・リーならではの口八丁手八丁の面白さです。ネットでもDVDでも観れるのでぜひ観てください。



ここで説明したいのは、

この映画が前述のシャーロットツビルの惨劇を意識し、実際に刻み付けていることです。時代への危機感、アフリカ系アメリカ人がそれを持たずには生きていけないであろうリスク感覚であり、変わらぬ社会の地金への怒りです。

この「危機」は、幾つもの類型のあるレイシズムの中で、古典的レイシズムと現代的レイシズムの関係を踏まえる必要があります。この映画の中でも徹底批判される『国民の創生』で描かれたのは、黒人とは悪に染まり易く、生き物として白人より劣っている存在であるとの認識です。それを作中で指弾するのは、黒人解放運動の「生ける伝説」でもある歌手、ハリー・ベラフォンテです。それは先ほど紹介した『マンディンゴ』に出て来る醜悪なレイシストたちの認識でもあります。それはユダヤ人虐殺や公民権運動を通して居場所を失いました。前述しましたが遺伝学的には人に「違い」というほどの「違い」はないし、能力に差などないということ。差は環境の産物でしかないことが明らかになりました。

一方で出て来るのが現代的レイシズムです。「もう差別などない」「なのに奴らは差別があると主張し」「利権やパイを得ている」「奴らは敵だ」——これが彼らの典型的言説とされています。いわゆる「同和対策事業」を巡る「逆差別批判」や、単なる妄想にすぎない「在日特権」言説も現代的レイシズムの一つです。この映画でも、登場する70年代の白人至上主義者たちは「現代的レイシズム」の言説を忠実になぞります——それもあってやや「図式的」なのが本作の難点ですが。

ここが本作の肝なのです。米国では古典的レイシズムが居場所を失う中で現代的レイシズムが前景化したといわれますが——異論もあります——トランプは違う。現代的レイシズムの世界で彼は「メキシコ人は麻薬の売人」「メキシコ人は強姦魔だ」などと公言して止みません。彼が最高権力者となる社会がどれだけ危険水域にあるかということです。日本はそもそも双方が立て分けられることなく飛び交い、双方を強化していますが。ユダヤ人虐殺や奴隷制に対する総括がなかった、換言すれば反差別と反歴史改竄の規範が打ち立てられたことのないこの社会の根本的問題を示しています。

## 日本で Black Lives Matter を考える意味

『ブラック・クラウンズマン』は2013年にスタートしたBLMも当然ながら射程に収めています。スローガンである

“Black Lives Matter” をカウンター参加者が唱和するシーンも出てきてフロイドさんの殺人を契機にした高揚と全世界の広がりを同時代とする者として胸が熱くなります。この言葉、「黒人の命は大切だ」とか「黒人の命も大切だ」とか色んな訳があります。私は「黒人の命は大切だ」と訳しますが、その時の運動段階や目標、誰に訴えるのかを踏まえた政治的判断として、いろんな訳はありえます。これに対して All Lives Matter との標語を掲げた人もいましたけど、これは明らかに論外です。All の中に Black の命が入っていないから Black って言っているわけで All なんてナンセンスだと思います。この運動の射程は問題の根源である奴隷制と植民地主義に至っています。特に欧州でこのムーブメントに連なる人たちはその色を強めています。奴隷制と植民地主義に手を染め、世界にレイシズムを蔓延させた歴史的な張本人だからです。奴隷貿易や植民地支配に多大な「功績」を残した人の銅像を引き倒し、海に放り込むなど直接的な行動も出てきている。その行為に眉をひそめる向きもあるかもしれませんが、私は違います。

これはやはり、白人キリスト教徒が築いた世界秩序、すなわち不正を元に築いた社会を享受してきた。あるいはその源に責任を持つ者たちが、アフリカ奴隷の末裔たちと繋がるための外せない礼儀だと思うのです。「差別」がない、平等で自由な社会、お互いを尊重する社会という夢を抱く人たちとつ



ながる、つながりたい。今とは違う今、今は違うけど有り得るかもしれない世界のドアに手を掛けたい考えるとき、私たちが何をしなければいけないか、何を考えなければいけないか、それは明白だと思うのです。

ではこの社会はどうでしょう？植民地政策と侵略戦争の結果に他ならない破局から七十五年余を経てなお、元「慰安婦」や徴用工への謝罪と補償は実現せず、植民地支配の結果として生まれた朝鮮学校に対する弾圧は改善どころか激化する一途です。今も彼女らは高校無償化の適用外とされ、今では幼保無償化やコロナ禍に伴う困窮学生支援策からも朝鮮学校生は排除されています。公が彼女らには何をしてもいいと宣言しているのです。その制度的差別は、マスク配布の対象から朝鮮幼稚園を除外して恥じぬメンタリティを形成しています。人種差別撤廃条約加入から四半世紀を経たこの社会の体たらくです。日本でBLMを考え、繋がるということは、自分たちにとっての「B」とは何なのかを地に足を付けて考え、行動することだと思うのです。

## 人権文化まちづくり講座

# 被差別部落と多文化共生

～マイノリティ3人が問いかけるルーツの話～

お話：黒島トーマス友基さん・三木幸美さん、重本洋輔さん

11月14日、とよなか国際交流協会の黒島トーマス友基さんと三木幸美さん、そして協会事務局の重本洋輔さんの3人に、アメラジアン、ハーフ、被差別部落出身というそれぞれの立場から、自分の生い立ちや家族の話、マイクロアグレッション、今後の夢などを語っていただきました。当日は豊中のみならず、遠方からの参加者、昨年のまちづくり講座に講師で来てくださった方、講師にお越しいただきたいと考えていた方など、多くの方に参加していただくことができた講座となりました。【文責：森山輝子】

### 自己紹介

トーマス：黒島トーマス友基と言います、よろしくお願ひします。1986年生まれです。僕、男性で珍しく苗字が1回、名前が1回変わっているんです。今のパートナーと結婚する前、市川トーマス友基っていう名前で生活をしていました。生まれてから高校3年生くらいまでは、市川友基です。高校時代にいろんな出会いとか、壁にぶち当たったりとかいろんなことがあって、トーマスという名前を新たに付けることになった。今は公益財団法人とよなか国際交流協会の職員で、日本語に関わる事業の担当をさせていただきます。

アメラジアンというのは、アメリカンとアジアンを足した言葉。この言葉

は、基地の中で働いているアメリカの兵隊さんと、現地の人との間に生まれた子どものことをさすことが多いです。僕もアメラジアンの一人なんです。大阪の住吉にも、戦後アメリカ軍の基地があった。白人専門のセックスワーカーとしておばあさんは住吉の基地のゲートの前に立って、おじいさんと知り合って、子どもが生まれて、その子どもが僕の父親です。

基地が関西からなくなっていく流れに乗って僕のおじいさんもアメリカに帰ってしまうことになった。うちの父親の国籍で言うと、この当時は男性が日本人でないと日本国籍をとれない状態だったので、婚姻届を出してない。非嫡出子という形だったら日本国籍取れるんです。逆に戸籍上はアメリカっ

てというのが全く証明できない状態で、目も茶色くて、髪の毛も茶色っぽくて、肌が白くて、みたいな感じで「市川タケシ」というバリバリ日本名で育っていくことになる。

友達の親から「あいつはあいのこだ」、「あいつはパンパン<sup>※</sup>の息子だ」(※進駐軍兵を客とするセックスワーカー女性に対する蔑称)とかっていうようなことを言われた。アメリカの文化や習慣、言葉が継承されずに、日本で生まれて育った。当然ですけど英語は話せない。ただアメリカへのあこがれみたいなのは人一倍強いみたいな感じの人でした。

僕の中でアメリカっていうものをプラスにとらえていたのが、小さいころだったと思っています。すごく小さいころから自分のルーツっていうのを聞かされていたので、いつそれを知ったかは覚えてません。アメリカ人のおじいちゃんがいるっていうことが、ちょっとカッコいいとか、自分のプライドになっていたりとか。

だんだんそれがしんどくなってきたのは、中学校時代でした。一つは体育の時間です。第二次性徴を迎えて、自分の変化が周りとは違うっていうことに気づく。一番違ったのは、体毛でした。胸毛が生えてきたんです。大げさでなく、死刑宣告にも近いような感覚だった。次は英語の時間でした。小さいころから、中学校になったら英語をすごくしゃべれるようになるんだよみたいなことを言われてたんですけど、びっくりするほど英語のテストが平均的な点数でした。



自信に繋がってた部分が折れてしまったような感覚があった。出自の事は悩んでいたんで、国語の時間に一回それをみんなの前で話したことがあるんです。自分としては結構勇気を振り絞って、悩みを発表する。何か変わるかなって思ったんですけど、教室の反応が全くなかった。「それでどうしたん」、「お前ひとりで考えときいや」みたいな雰囲気やったんです。それと対照的やったのが美術の時間でした。白黒写真を持ってきて、それを黒い紙に白いペンで描くっていう課題が出て、家族のすごく大切なおじいさんの写真をもっていったんです。その写真にクラスの一人の子が気が付いて、「お前何もってきてんねん、こんなん持ってきて調子乗ってんか、英語も話されへんのに。」って言ったんですね。「ほんまや、市川何もってきてんねん」「こんなん持ってきてどういうつもりやねん」「目立ちたいんか」みたいな話になって、その写真がその場で取り上げられて、後日バラバラになってカバンの中から出てくるっていう事件があったんです。

とてもショックな出来事でした。体

育の時間は僕にとって絶対に話せない秘密がばれる恐怖があった。英語の時間は昔からの自信が劣等感に変わった。国語の時間は思いを話しても何も変わらない。美術の時間は他人と違うということは攻撃をされてしまうということを僕の心にすごく植え付けることになった学生時代でした。

重本：一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会の重本と言います。よろしく申し上げます。僕は1981年に豊中市で生まれました。今の職場でもある人権平和センター豊中とは生まれたときから深い縁があります。

当時は豊中解放会館という名前で、僕は1階の保育所で乳幼児期を過ごし、小学校に入学してからは3階の児童館に通うようになりました。当時の児童館で行われていたのは「部落解放こども会」という部落の子どもを対象にした活動で、部落差別に打ち勝つ人間として、仲間と共に成長しあうことを目標に、子どもたちの手による自主的な活動を進め、仲間意識、部落民としての誇りや自覚を育てる。差別を見抜き、解放の思想を支える豊かな感性を育てる。差別と闘う力、たくましく生きていく力として解放の学力を会得する。親や地域、学校・保育所と連携して、地域に根差したこども会づくりを進める。などといった活動が行われていました。

僕はこの活動に中学3年生まで参加して、自分が部落の出身ということを実感・理解していきました。高校に



進学して数年間くらい、解放会館に入りしなくなった時期や、部落問題と疎遠になった時期もあったんですが、2005年から今のとよなか人権文化まちづくり協会の職員として働かせてもらうことになり、部落問題や人権啓発に関わる活動をしています。僕が力を入れているのは、地元豊中の部落を案内するフィールドワークです。学校の授業で部落問題を教わる機会が少なくなったり、インターネットで部落問題の誤った認識とか差別情報とか、マイナスイメージが拡散されたりする中で、行政の職員、教職員、大学生を対象に、嘘偽りのない、本当の部落の姿を見てもらうこと、部落問題や被差別部落への正しい理解を広めていくことをモットーに今取り組んでいます。

三木：とよなか国際交流協会の職員です。協会での仕事と、子どもたちとダンスをする活動を2013年から続けています。文章を書く仕事も時たましています。ちっちゃい時の自分は、周りからの目線とか、なんで自分こういうこと言われるんかなって考えてきた。それが途中で、自分一人がどうやった



ら楽になるかっていうことから、私たちが暮らしやすい社会にすることで、自分も自分以外の人も暮らしやすくなるんじゃないかっていう風が変わっていきます。

私の人生には戸籍がない時代がありました。私が生まれたのは1991年で、当時は日本国籍を取るには日本人の父親の場合、胎児のうちに認知をもらっていることが条件としてありました。ただ、私の母親がフィリピンから日本に入学して、私の父親と出会い、私が生まれるころには自分の在留資格をもう失っていた状態で、最悪の場合、強制退国させられることもあった。母親として、フィリピンにいる家族のために二十歳そこらで日本に来て、たとえば好きな人と出会って一緒に暮らしたいとか、子どもも生まれてここで家族として暮らしていきたいって、当たり前にもやりたいと思うことですよ。それが自分の在留資格がないことでできなくなってしまふんじゃないかってずっと恐怖だった。「この子は小学校に行けないのかも」という相談から支援機関にもつながって、最終的には在留資格をとって、私も日本国籍を取る

ことになるんです。

8歳の時に、今の「三木幸美」っていう名前になります。国籍を取るまでは、「幸美パンガヤン」っていう名前がありました。母方の姓です。それを戸籍には入れないんです。母親は自分が外国人として暮らしていくときに、どういう扱いを受けるかっていうことをものすごくよくわかっていたし、名前としてルーツがあるってわかることで、不必要に傷つけられるんじゃないかっていうことをすごく恐れていました。

無国籍とか無登録児って話をするとか、かわいそうとか、ひっそり逃げ隠れて過ごしてたんじゃないかって思われることがあるんですけど、そんなことはなかった。

近所のスーパーに買い物にも行きまですし、公園に遊びに行ったりもします。でも、例えば、私が熱を出して病院に行きたいと思っても、保険証もないですし、戸籍も国籍もないですから、病院に頼るってことはできない。子どもが公園でいじめられてても、大事になるのが怖くて声をあげられない。そういう生活への支障はありました。

私は被差別部落に生まれ育ったんですが、自分が部落民として話をするっていうのができるようになったのは実は大人になってからです。97年に小学校に入るんですけど、2002年に同和対策事業の特別措置法が終わる。部落問題について学ぶっていうところから、大きなくくりの『人権』として勉強していく中で、部落問題も外国人

の問題もやっていくっていう風になっていきます。私の場合は幼いころから、外国人として見られることっていう方がやっぱり圧倒的に多かった。それは見た目が違うから。私は8歳まで戸籍がないまま学校に通ってましたから、仮に通学路の途中とかで事故にあっても保障の対象外で。母は私を日本人として育てたいと思ってますから、それでも学校に通わせる。そうすると、通学路心配で迎えに来るんです。学校で身支度してると、早く身支度が終わって、みんなが帰っていくときに、まわり子どもたちが「わあガイジンや」って騒ぐんですよね。それがすごく不思議だった。

それでもすごく熱心に人権教育をやっている学校にずっと小中高通い続けるんです。その中で自分が一番記憶に残っている授業って、人の人生を聞くっていう授業だったんですよ。なぜそこに住むことになったのか、なぜその仕事しているのか、今暮らしているときにどう思っているのかっていう話をずっと追っかけて聞く。その人の話を聞けば聞くほど、つらいな、自分が大人になったらこんなに社会は冷たいのかなって不安になる部分もあるけれども、話のなかにはすごく頼もしいとか、うれしい、頑張ろうっていう気持ちになる部分もあった。みんな自分にとってすごく大切だと思ってるものはやっぱり絶対に譲らないっていう姿勢を持っているんです。その人も悩みながら間違えたり失敗したり悲しんだり後悔したり、それでも今の自分にとっ

て大事なものは譲らないんだってことを話してくれる。そういう話を聞くと、自分自身も、やっぱり大事なものってあきらめなくていいんだって思う。

でも、普段生活しているときはなかなかそう思えない。「お母さんガイジンなん？じゃあ英語しゃべれんの？」「しゃべられへん」「なーんや」みたいな。マルだったら「やっぱりー」って言われるし、バツだったら「なんやねーん」って言われるし、自分にとっての正解と相手が思う正解って全然違う。そのギャップにすごく悩むようになります。小学校一年生の時の宿題で、お母さんにインタビューにするんですよ。母は「メルバ」っていう名前なんですけれども、私、名前のところに「三木じゅん子」って書いてるんですよ。たぶん名前聞いたときにメルバって言われたんですけど、ちゃんと聞き取れなくて、「ほかの名前ないの？」って聞いた記憶があるんです。出てきたのが「じゅん子」で、それは母が日本で仕事をしていた時の源氏名だった。それを私も喜んで書きちゃうわけです。

それくらい、これって出しているものなんだろうか、って考えて自分を取捨選択するような子ども時代だった。今は、そういうのに「マイクロアグレッション」っていう名前がついているのがわかるんです。圧倒的に攻撃的な差別としての行動ではないけれども、やっぱりすごくモヤモヤした気持ちを残すもの。そういう質問を向けられるときに、私に向けてじゃなくて、なんかその先に答えがあって、それと答え

合わせをしてるんじゃないかって思ってたんです。自分に向けられる言葉なんだけど、自分の後ろを通り抜けていくような。そういうことによって、私自身も選ぶ言葉が変わっていく子どもだったんです。嘘つこうと思って嘘ついてるわけじゃないけど、自分が一番選びたかった答えではないものを選んでしまうっていうのが、私が子ども時代に身につけてしまった能力でもあった。

それは、中学校の時に参加した「反差別共闘委員会」の活動を通して変わっていきます。自分の生きづらさが社会の中でどういう位置づけにされているのか、社会のどういう部分が作用して今日の自分の生きづらさにつながっているのかを、改めて考えてみる活動だったんです。例えば、実際自分が初めて差別を受けたときって、差別をする相手は自分の幼馴染だったんです。差別する人は性格が悪くて、される人は弱くてかわいそうっていう風に最初から役割が決まっているわけじゃないって気がつくんです。それと同じように、目の前に起きている問題につ



いて自分は何ができるかって考えるのは被害者と加害者だけでなく、それぞれの立場でできるんだってことをここで初めて学ぶ。それがその後の私の仕事や活動にもつながっていくかなって思います。

## 家族・思春期について

重本：父と母は、二人とも部落出身者です。母は小さいころから親に「あんたは部落やで、差別されるで」と教えられてきたそうなのですが、大きい部落に住んでいたこともあって、小学校も中学校も、一般の子より部落の子の方が多かったそうです。自分らがマジョリティっていう感じで、あまり気にせずに部落の子とも一般の子とも仲良く遊んでいたそうです。ただ、一般の子が時々、「親に内緒で来てん」「そこ行ったら言ったら怒られるねん」みたいなことを言っていたのは聞いたことあるみたいです。

父は高校に進学する頃に自分が部落やと知ったそうで、小学校の時代も中学校の時代も、部落という言葉は知らなかったみたいです。ただ、高校の時に部落って知って、びっくりしたとかショックを受けたとかいうこともなかったと聞いてます。高校時代、クラスメイトに「豊中の部落ってところ、やばいやつ多いから気をつけろよ」みたいなことを言われて、「いや、俺も部落やけど、そんなことないと思うけどな」みたいなことをあっけらかんに言ったら、「そういう嘘はやめとけ」「部落のやつに聞かれたら殺されるで」

と信じてもらえなかったっていうエピソードがあったみたいです。

部落出身者同士の交際・結婚ってことで、特に交際に反対されたり、結婚差別に遭うってこともなく、スムーズに結婚に至ったと聞いてます。それでも、自分たちの身近なところで起こった結婚差別とか部落差別を目の当たりにしてきたこと、それから当時、部落解放運動が全国的に活発やったこと、僕が生まれて「子どもには差別を受けてほしくない」と思ったことから、豊中の部落解放運動にずっと取り組んできたという風に聞いてます。僕が小学校に上がるにあたって、家に就学通知書が届いたとき、自分の子が解放会館の保育所という、ある意味で部落差別から守られていた世界から、いよいよ差別のある外の世界に出ていくってことで、親としてはものすごく不安な気持ちになったと、戦時中の赤紙（召集令状）が届いたような気持ちやったり聞きました。自分の子が来年から小学校ということで、親にとったら喜ばしいはずなんですけど、心の底からは喜ばなかったそうです。

思春期の話でいうと、中学時代は自分が部落ということを人生で一番意識した時期でした。中学生になって、差別の怖さについて自分なりに想像できるようになると、自分が部落ってことがすごく怖くなっていったんです。それに加えて中学時代は、障害を持つ子を馬鹿にする言葉をギャグみたいな感覚で使ったり、いじめにつながりかねないような遊びが流行ったりなど、周

りにそういう雰囲気があって、もしかしたら自分も差別されるんちゃうかと思うようになっていったんです、そういう不安な気持ちがどこか心の片隅にあったと記憶しています。だから中学時代は子ども会活動に参加していることをなるべく隠したいと思うようになった。部落のことがばれたらギャグにしてなんか言われるんちゃうかとかそういう感じでした。たまに聞かれるんです。「解放会館に何しに行ってるの？」と。そんなときは「塾みたいなのところやねん」とか「ボーイスカウトみたいなのところやねん」と、誤魔化すようにしてました。

三木：思春期、親と仲良かったですか？。

トーマス：全然無理。特に母親ですね。うちの父親と母親を見てると、終始すれ違ってるみたいな感じを受けて。うちの父親は、母親とは中学校で出会ってるんです。母親は、マジョリティの立場から父親を見てるわけです。だから大人になってからとかでも、うちのお父さんはハーフやったから目もすつとしててな…男前で…みたいな。それを父親は「…うん」みたいな感じで聞いてるんですけど、見た目の部分ってコンプレックスでももちろんあるわけです。それを惜しげもなく言う母親と、まんざらでもないけど引っかかんねん、みたいな感覚を持ち合わせる父親っていうのは、なんで一緒におるんかなって思春期の時は思ったりして

た。その最たるものっていうのはうちの祖父母なんですよね。言語的な部分で、まともな会話って出来てないのにそれが、まかり通るっていうか。そういう部分、すごく引っ掛かった。思春期の時は母親に対して、当時の自分の感じていた言葉のままだと、「一番嫌いな日本人のタイプ」みたいな感じのことを投影してた部分はあったかな。

三木：私も自分の父親が一番日本人で嫌いなタイプです（笑）

家の中で自分の事をわかってもらえるってやっぱりない。父親 100%日本人、母親 100%外国人、私は半分で、どちらも部落に転入してきた人なのでまったく同じ立場で共感をするってすごく難しくて。

初めて差別を受けた時も父親って、いわゆる自己責任論的な考え方で、自分でなんとかしたらいいや、その力がないお前が弱っちいやみたいな感じで。母親もある種、自分の立場の弱さみたいなものを受け入れてしまう部分もあって、自分が圧倒的な差別を受けても、そこで笑い飛ばす力があつた、それは多分笑い飛ばすしかなかったっていうことやと思うんです。

パートで働こうと応募の電話をして、「どこの国の人ですか？」、「フィリピンです」、ガチャン！って切られるっていうのもあつたし。その瞬間、母親って一瞬停止してすぐ戻るんです。「ああ、またやられた、あんなどこ私から行かへんわ」っていうんですね。それが本当にも



う癖みたいな感じになってて、そうやって怒らずに笑い飛ばす母親に腹を立てていたこともありました。でも、笑い飛ばすっていうことも母親にとっては一つの対処法だったって今となってはわかるんです。

差別とか嫌な出来事が自分にも向かうってやっぱりリアルに想像できていなかった。でも初めて自分に向いたときに、何も身動きが取れなくなって、ただ泣くしかできなくて、走ってその場から逃げるみたいなことしかできなかった、それぐらいダメージと傷を与えるってわかってるのに、それでも同じことを母親にしたこともありました。

高校受験したいと思っても、パンフレット持って帰って見せるだけじゃわからない。母親が行ってる識字学級に私も夜いっしょに学校ついて行って、同じ小学校2年生のピンクの横長の漢字ドリルやったの覚えてて、読み書き変わらずやってきたことなのに、中3になって急に、なんでこんなことしなあかんのやろうって思うわけです。自分にとって一番頼れたり、話が出来た



り、わかってもらえたりする可能性があるのも家族だったはずなんですけれども、当時は全くそれができないってことが、他の家庭と比べて嫌だったっていう時期でもありました。

受験の時期が近づいて、母親と口論になって自分の親に向かって「うっさいねん」「日本語へたくそで何しゃべってるかわからんわ、ちゃんと喋れるようになってから出直して来いよ」っていう風にまくし立てて言っちゃうんです。よく考えてみたら、差別をされること以上に、自分の悩みとか、思っていることが誰にも見えないものになっているっていうことに、どこか焦りというか、つらさみたいなものを感じていました。

## マイクロアグレッション / 違いを感じる瞬間について

トーマス：マイクロアグレッションって、みなさんわかりますか？自分とは違うものを求められる瞬間とか、居心地悪いみたいな感覚がマイクロアグレッションという考え方。

三木：最初このマイクロアグレッションって言葉知ったとき、私うれしくて。なかったですか？

トーマス：「あ、これマイクロアグレッションっていうんや」っていううれしい気持ちもあったけど、じゃあそれをどういう風に対処したらいいんかなっていうのをすごく考えてて。マイクロアグレッションって向こうはもちろん悪意もなければ無意識っていうか、たち悪い時は善意でそれが出てきたりする場面もあるわけです。

それがすごい出たのが先日の入院生活中です。口が腫れてもうぜんぜん口開かずの生活してたんですけど、その状態で病院に行って、紙に筆談でやってみたいな感じだったんですけど、問診票を日本語で書いているのに、ポケットークが出てきて（笑）

要は「(歯が痛くて)日本語が喋れない」→「トーマス」→「ガイジン来た」みたいな感じで。ポケットークも、日本語でしゃべって英語で翻訳されるけど、僕が聞いているの日本語なんです。それで理解して、また筆談で日本語で返すのにまたポケットークで返す。

けど、悪いと思わないんです。どんなに理解が進んでも、目の前にしゃべれないトーマスさんが来たら、たぶん同じことをすると思うんです。それにどういう風に対応したらいいのか。極端な話、「僕は日本語しかしゃべれないんだ、トーマスだからってそんなポケットーク出すなんか失礼だろう！」みたいな感じで戦えばいいのか。戦った

場合、向こうは「ごめんなさい、申し訳なかったです」というけど、心のどこかで「は？」って思うと思うんですよ。そのまま残すと、それって僕らが暮らしやすい社会になるかどうかって逆効果の部分もあるような気もしています。

三木：でも私はそれ、本人にちゃんと聞けばいいんじゃないって思っちゃう。私、「差別」って善意も悪意もまったく関係ないと思うんですよ。関係させちゃいけない。発信者の意図が善意だったから、傷つける行為がちょっと情状酌量されることって絶対ないと思っていて、それが相手にとって差別として作用したなら、それはもう差別なんだって思ってもいいと思う。

マイクロアグレッションって「嫌かもしれへんけど実はそんなことないで」「それってこうやから」と風「善意」で閉じ込めてさらに言わせなくする、マイノリティに笑いかけながら黙らせる行為でもあると思っていて。ただその抑圧を、超えていける人たちもいるわけです。私たちがマイクロアグ



レッションを受けても「やっぱりこれが大事だ」と言えるのは、つながりを持ったり、話せる場所があったからそう思えるだけで、マイクロアグレッションの行為自体は善意悪意みたいなもので判断ってしない方がいいんじゃないかと思うんですよ。

重本：マイクロアグレッションとはちょっと違うかもしれないですけど、部落差別なんか教えなかったらなくなるんちゃうとか、自分は部落とか別気にしてないよって軽い感じで言われたら、なんかモヤモヤとしますね。重く受け止められるのも困るけど、軽すぎるのもちょっと…。

三木：自分にとっても大事な話を話すときと、自分のテンションと受け取り側のテンションが違う時ってあるじゃないですか。

トーマス：自分に対して攻撃されるとか向けられるときって結構耐えちゃう部分ってあるんですけど、自分の友達とか、周りに対して何かやられたときは結構カチンとくるのが結構多くて。セクシュアルマイノリティの方が除外されるようなことがあったときは、彼女が置かれている状況が、すごく自分の事のように思ってしまった、めちゃくちゃあの時は腹が立ったことはありますね。

重本：違いを感じることは、あたりしですか？

僕は昔の方が違いをよく感じてたかな。僕の場合は部落出身で周りとうって変な言い方になるけど、子どもながらに感じてた時期はあったかな。例えば、学校終わったら解放会館に行って子ども会活動に参加してるけど、他の子は家に帰るみたいなの。先生が学校でも学校以外の場所でも、自分らに関わってくるとかそういうので子どもなりに他の子と僕らは違うねんなみたいな感じでルーツに芽生えて行ったかなっていう風に思います。今は逆に部落と部落外で何が違うねん、一緒やんけって思いの方が強いかなと思います。

## 夢・やりたいこと

トーマス 夢ね…。子どもが二人いるんです。僕のトーマスっていう名前、高校生の時に友達とかいろんな先生との出会いがあってルーツと向き合って付けかわえて、今戸籍上もついてるんですけど、子どもが生まれたときに、子どもにトーマスをつけるかどうかっていうのはすごく悩んだんです。けど、トーマスっていう名前を二人とも入れたんです。やっぱりルーツを受け入れて、自分の体の一部として、大切なものとして生きていてもらいたいなって思いがやっぱりあったし、与えることはできても奪うことはしたらあかんよなっていう気持ちもすごく強かったんです。将来子どもたちがトーマスっていう名前で悩んで、トーマスっていややから名前から外すわっていうんやったら、それはそれで僕は



いいと思うんですけど、できるだけそういう思いをしてほしくないなって思う。思春期の時絶対悩むと思うんですけど、いろんな形で仲間とか話せる相手がいればいいなって思うし、それをサポートできるように今からしていきたいなっていう風に思う。できるだけルーツをまた削らなあかんっていう選択を彼らがしなくてもいいように。地域とか社会とかのレベルでどうやってやっていったらいいのか。マイクロアグレッションをどういう風にアプローチしていくかっていうこともあると思うんですけど、その輪を広げていけたらいいなって。それが、大きすぎるし、具体的じゃないかもしれないですけど、僕の今の夢とかやりたいことかな。

三木：自分自身が小さい時から大人になるまで、強く生きてきた人にたくさん出会ってきたんです。その強さに憧れたり、すごいなって思う部分ってあるんですけど、強くあんなきやいけなかった社会を作り替えていくってのは、次の世代がやっていけることかなと思っていて。誰もが生き延びやすい社会を目指す方がいいんじゃないかなっていう風に考えるようになりまし

た。差別される側だけが強くなって、差別をも跳ね返す力を身につけるよりは、誰かが嫌な思いをする出来事が起きたときに、そこに一緒にいる人も怒っていいはずだし、そういう怒りを持つことができるのは決して指をさされる側だけじゃないっていう風に思っていて、この社会を引き受けてくれるような人をたくさん増やしていけたらいいなって思ってます。

重本：僕の場合はお二人ほど具体的な夢ってわけじゃないですけど、今日は「被差別部落と多文化共生」というテーマ

なんですけど、やっぱり僕としては部落差別の解消と多文化共生社会の実現ですね。ありきたりなことしか言えないですけど、自分の親もそうやし、親世代の人もそうやし、昔の人たちが頑張ってきてくれたおかげで、僕らが昔ほど厳しい差別を受けることなく生活できていると思うんで、自分のできることって限られてるし、こうすればいいとか斬新なアイデアとかも今すぐ浮かばないんですけど、自分たちのできる範囲で引き継いでいくというか、引き続き差別解消とか多文化共生社会の実現を目指していけたらなという風に思います。

地域に根ざす団体として

## 「安心・自信・自由」を届けるCAP事業

～ここから何かが始まる予感～

協会がドコモ市民活動団体助成事業を受けて、昨年9月からCAP（子どもへの暴力防止プログラム）を地域の大人や学校に届けるプロジェクトが始まっています（協力：NPO法人CAPみしま大阪）。21年1月には豊中市立第5中学校2年生106人が、2日間に渡り、中学生暴力防止プログラムを体験しました。今回は、この事業に関わる関係者が集まって、感想や課題を率直に話し合いました。

出席者：福間香代子（第五中学校）、清野真樹子（箕輪小学校）、大路凌大（克明小学校）、新保貴子（ともだちこども園園長）、土井聡子（翼主任）、CAPみしま・大阪（木下由美子・牧野由紀子・山根若子・中村美紀子）、西村寿子（協会理事）、森山輝子（事務局）【進行・まとめ：西村寿子】

### おとなワークショップを導入して

西村：去年9月から「ドコモ市民活動

団体助成事業」を受け、ほぼ半年弱が経過しました。皆様のおかげで非常に順調に事業が進んでいます。今日は、今後の進め方や、進めていくうえでの

課題について意見交換したいと思います。今回、CAP 事業を導入して、五中の保護者ワークの時に、協会事業に参加している市民が二人参加したのですが、「子どもの人権」をキーワードにしながら、いろんな人が意見を交流する動きを作っていけると実感しています。おとなワークショップに参加してのご感想や、職場で実施していただいた感想を教えてくださいませんか。

土井：子どもに CAP を導入することは、私たちもまだどういう形ができるのかと思っています。ただ小規模施設なので、グループでやりやすい。子どもたちに日常的にライフストーリーワーク、生い立ち整理もやっているのです、そのあたりともどうリンクしていったら、より子どもたちに自分にとっての権利を伝えて行けるかなと考えています。職員研修でも改めて、「安心・自信・自由」の関係性がスッと入ってきて、やっぱり安心した状況がないと子どもは SOS なんか出せない、CAP の皆さんに教えていただき、日々やっていることをとらえることができていたと感じています。権利も日常の



中で伝える場面、あなたにも権利があるけど、周りの子にも権利があることを伝えるにしても、それを大事にされてこなかった子たちなので、うまく伝わらないってことなんかは日常の中で職員自身も経験として持っていたので、わかりやすく伝えることもすごく勉強になったと感じています。この先にぜひつなげていきたいなと思っています。

CAP：翼の職員ワーク、本当に真剣に、若い職員さんから質問も出て来て、私にとってもすごく手応えを感じたワークショップでした。

西村：こども園も、職員研修としてやっていただきました。なにか共有できることがあれば教えていただければと思います。

新保：子どもたちが「いや」と言える大事さ、保護者に対しても子どもたちは言えてるのかな、私たち保育者に対しても言えてるのかなと見直しもあり、お家の背景をしっかりとキャッチしていかないといけないところを職員はもっと理解していかないといけない点や、ともに子育てしていく気持ちを持ちたいなど、このワークショップで感じていました。

西村：昨年9月のおとなワークショップに参加した感想などはいかがでしょう。



大路：子どもは権利の主体であることが、良くわかりました。実際に自分が権利の主体としてこっちは伝えたいけども、なかなかその辺をどうしたらわかるのかなって日々思いながら、参加しましたが、それがすごいスッと入ってきました。現に子どもたちを見ていると、いろんな権利に関わって、学ぶ権利が奪われている子ども、育つ権利が奪われている子どもがいるわけで、学ぶきっかけもあるのかなど。五中の合同研修を職員も一緒に受けさせてもらって職員もCAPプログラムの雰囲気があったと思います。具体的に子どもたちへの導入については学年の担当とまた相談しながら活用していきたいと思っています。

清野：箕輪としては低学年の子に教えたいと、来年度受けられるような方向でいこうかなど。なかなか箕輪の校区の子どもたちの実情として、自分の権利に気づいていない、今の自分が当たり前と思っている子たちも多分たくさんいるので、ワークショップを受けて経験することで子ども自身も気づいてほしいと考えています。

## 小中連携の中で

西村：この地域として、五中与小学校がきっちりとつながって、連携をとっていただいています。五中の教職員ワークの時に克明小学校の先生、箕輪小学校の先生と時間は短かったんですけど、子どもたちの実情を聞かせていただいて地域を身近に感じることができました。CAPの導入にとどまらずに、連携した動きを作っていただいて本当にありがたいなと感じています。

福間：今年になって全国で「キャリアパスポート」(※注)を実施することになったことをきっかけに、これを追い風にして、キャリア教育の小中連絡会議を年間で10回、コロナの間もずっとやってきました。このように連携を進めてきた中でCAPの話があったので、CAP導入にあたって情報共有ができ、進めやすかったと思います。五中での導入については、男女共生教育で「デートDV」をテーマにやりたいというもとの学年の意向と、さらに、これは大事なことからCAPをぜひやりましょうっていう話になって動き出しました。

日時	内容	参加者
9月4日	おとなワークショップ	13人
10月28日	ともだちこども園職員研修	36人
11月18日	翼職員ワークショップ	16人
12月9日	五中保護者ワークショップ	23人
12月24日	五中教職員ワークショップ	64人
1月26日、28日	五中生子どもワークショップ	106人

当日の様子で言うと、「安心・自信・自由」がとてもわかりやすく、教職員の感想でも、「安心・自信・自由」を後から何回も言っている子がいたと聞きました。私が思ったのは、ワークショップで「安心・自信・自由」が奪われたらどんな気持ちになりますかという話で色々子どもの気持ちが出てきて、今後子どもたちが、自分がもししんどい気持ちになったときに、自分のせいにするのではなく、これは「安心・自信・自由」の権利が奪われてると考えてくれるのではないかと思いました。自分の権利が奪われているのに気が付かないことが、子どもはすごく多いと思うので、「自分の人権を守る」という視点が重要だと思っています。自分も含めて、以前から教職員も、「人権、人権っていうばかりで責任がないじゃないか」、という受け止め方がいまだにあると思うんです。その辺りも含めて具体的にわかったのでよかったですと思います。ワークショップをじっと見ている子どもも本当に真剣でした。

また、後半、ジェンダーと暴力の話から、性暴力の話に入っていきのがわかりやすいと思いました。子どもたち

の中に、性暴力の話になると、さまざまな発言もありましたが、聞いていないように見える子どもも、実はすごく真剣に話を聞いていたと思いました。本当にすべての子どもたちに出会わせたいワークショップでした。

ただ、休みがちな子どもなど、本当に届けたい子どもたちにどうしたら届けられるのか、という課題もあります。事前に実施した保護者ワークも大変好評でした。おとなが学ぶことも大切だと感じます。

土井：クラスでやったときに、ちょっと話を聞くのはしんどいな、みたいな子とか、終わってからしんどくなったというのは特になかったですか。

CAP：ワークの中で、ちょっと嫌な気持ちになったり、しんどい気持ちになった人は発言してくれてもいいし、友達のそばや私たちのそばとか先生のそばで話を聞くこともできるよ、と伝え、後にトークタイムを設けてるので、そこで話してくれていいよって、いつでも話聞くよっていう安心感の中で、ワークショップを運べるようにはして

(※注) キャリアパスポートとは「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ」その目的とは「小学校から高等学校を通じて、児

童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの」(大阪府教育庁『『キャリアパスポート』の様式例と指導上の留意事項』より)

います。

西村：CAP みしまの皆さんは、児童養護施設の実施経験もすごく長いので、今回協会はCAP みしま大阪にお願いしています。

CAP：私たちは6か所くらいの児童養護施設でやらせていただいています。共通することはどこの施設でも、1年目はなかなか子どもとの距離も難しかった。それを諦めずに2年3年続けていくと、お互いに距離がわかって、だんだんとスムーズにいくようになります。だから1年目見て、ああこれはダメだって思わないでほしいなと思うんです。2年3年続けていくことによって、職員さんも変わられて、職員さんが明るくなられるのを感じます。子どもたちもなんか変わってくるんですよ。

新保：年長児、5歳児だったら子どもたち同士でも劇をつくるとか、発表会の取り組みでやってるんですけど、意見を出し合ったり、ぶつかり合ったりしているので、本当に子ども目線で、子どもへの語りかけだったので、心に入っていくのかなって思うんです。

## 子どもの声をキャッチできる大人に

大路：子どもたちが権利の主体であって、ただ被害に遭ったときに、たまに感じるのが、発信をしないと伝わらな



いというか。

森山：おとながキャッチできないってことですよね。

大路：こっちがキャッチできなければもったいないし、その子が発信できる状態にあるのかどうか。教職員の対応で子どもがたとえ発信したとしても、受け取り手がちゃんとそれを、丁寧にどう返していくのか、何気ない言葉一つで変わってきます。

CAP：子どもって、聴いてくれる大人がいないと話せないんですよね。だからCAPは子どもだけではなく、教職員、保護者に、子どもにCAPを届ける前にどうやって話を聴いたらいいか、こんな言葉かけがいいよと、うなずきながらしっかり話を最後まで聴くことの大切さを伝えます。子どもに、いやって言ってもいいよ、逃げてもいいよ、相談してもいいよと言っても、聴いてくれる大人がいない。そして、味方になってくれる友達もいない。そして、家族も支えてくれない、そんな状況の中にいるから言えないんですよね。その状



況を変えるためにおとなワークをしています。ワークショップって不思議なことに心が動くんですよ。劇を見たときに被害者の気持ちになって揺れ動いていくと考え方が変わるんです。

五中の2年生の全体106人のアンケートを全部集計すると「ワークショップを受けてどう思いましたか」に対して、「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」でいたい70%以上。「ワークショップは役に立つと思いますか」に関しては、90数%の生徒さんが役に立つと回答しています。

福間：数字でもちゃんと出て来ているのを見て、先生方にも結果をきちんと返せるなと思います。CAPに限らないけど、学校の外から見ていただいた視点を出していただくことで、教職員は普段気づかないけれど、そういうよさもあると気づけて、元気づけられることがあります。また、学年朝礼で話題にしたり、授業で「安心、自信、自由」という言葉かけをしたら、安心した表情が見られたという話も聞きました。

西村：五中の日常の取り組みがあって

のことだと思えますし、子どもたちも何かのきっかけで、これからの生き方に関わっていく。先生もこのCAPの考え方を使って子どもたちと一緒に何かしたり、きっと波及効果を生んでいくのかなと感じました。

CAP：今、福間先生からうかがって、日常で新たに使うのがすごくうれしくて。私たちはワークショップをやるだけなので、先生たちが使っているというのがすごい感謝の気持ちでいっぱいです。子どもに視点を当てて、しかも被害者目線なので、結果として、自分はその子の権利、安心・自信・自由を取っていたなっていう風なことにも思い至ることがでてくるのがCAPですね。

新保：こどもの年齢に合ったロールプレイで、客観的にああいうことやったことあるとか、ああやってもらったら気持ちよくなったなっていうのを感じられるんじゃないかなっていうのを改めて私自身も感じたので、本当にこども園の年長には経験してほしいなと思いました。大人がどういう風に子どもたちの声をキャッチしていくかは、こども園でもそうだと思います。子どもの声に、「大丈夫、大丈夫」で済ませてしまっていないとか。どういう風に子どもに寄り添って、言葉かけや行動を起こしていくかは、自分たちの感性を磨いていかないといけないなと思いました。



### CAP を地域で進める意味

土井：翼はお家で、お家以外のところでも共感してくれる大人がいたり、大人は安心できる人なんやなと感じられる積み重ねがすごく大事やと思います。家庭力がすごく心配な状況で、家庭に戻していく子どもの方がどちらかというときが多い現状です。その時に地域や学校で、子どもが頼れたり、キャッチしてくれる、しんどいって言いんやって思える周囲の力がすごく大事だと思っていて、家庭が心配でも学校にちゃんとつなぎたいなど。せめて一日の半分を過ごしている学校が安心して安全に、そして聴いてくれる人がいたら、家庭がしんどくてもそこで何かキャッチしてもらえたらと思うので。そうできるためにも、私たちは、日々の生活の中で子どもの声を拾うということが大事だなと思っています。CAP も一回やったら身につくかっていうとやっぱりそうではないので、定期的に学びなおすことで、そういう意味では子どもの年齢も年長さん、小学校低学年くらいで導入していけそうかなと考えています。

大路：CAP 事業を地域として受けることで、こども園から、小学校・中学校と一緒に考える機会になったので、ありがたいなと思っています。児童養護施設だけじゃなくて学校現場も同じで、一回だけやったらそれでいいわけでもなく、アンケートも見させてもらって、効果が見えます。ちょっと気になったのが、「つらい気持ちになったときにあなたはどうしますか」の項目で、「我慢する」が多いなって思って、それは五中校区の課題として、不登校生が多いってところと結びついていいるかもしれない。安心できる人って誰なのかな、お家の人に話せなかったら、誰に話せるのかなとか、そこに向き合わない限り、不登校の問題も解決には向かわないのではと思いました。

福岡：私は、学校間で同じ方向性をもって教職員で取り組んでいく取り組みの一つとして12月に小中合同研修として教職員ワークができたことがよかったですと思っています。後半も大路さんから生起している事案を「子どもの人権が奪われる」という観点で話をしていたいただいたのが本当によかった。

そことCAPのワークが結びついて、小中合同研修で事例報告と話し合いができて、しかも、小中連携と地域がつながっていくことになったのもよかったです。

森山：助成事業、来年再来年も頑張っ取りに行きたいなと思っているので、ぜひ継続や導入を考えて欲しいと

思います。

西村:私も12月の教職員ワークショップ後の小グループでの話し合いが実は一番心に残っています。先生たちもすごく一生懸命関わっておられますが、今、学校に来にくい子が増えていて、しかも生活そのものが根底からどう手

をつけていったらいいのかわからないという実情を聞かせていただいて、これから何かほかにできることってないのだろうかと考えています。でも、こうしてみなさんと繋がったので、また何か創りだせそうな気持ちです。長時間ありがとうございました。

## 子ども居場所事業

# 2020年度を振り返って

田中新三（子ども事業スタッフ）

昨年4月から、子どもの居場所事業（豊中市委託事業）が開始になりましたが、緊急事態宣言により小・中学校が休校で、6月1日からようやく開始することが出来ました。しかし、11月から人権平和センター豊中が全館空調工事のため、岡町北住宅集会所に居場所事業の場所を移して、実施することになり、場所が変わって子どもたちが来てくれるか心配しましたが、初日から笑顔で訪れて来てくれたのでとても嬉しかったです。

子どもたちが自然と声を出して笑い合う様子がうかがえ、和やかな気分になりました。

学年や学校を超えて交流し、それぞれがとても満足して帰って行ったのを見て、子どもたちの気持ちは顔が全てを表しているなあと感じ、スタッフも



子どもたちの折り紙作品

改めて優しい笑顔で子どもたちと関わりたいと思いました。地域や学校、年齢を超えて、共に元気に過ごす居場所を、これからも子どもたちが訪れやすい場所として提供出来るようスタッフと話し合いながら、すすめて行こうと思います。また、自主事業で行っている「ドコモ市民活動団体助成事業」と連携しながら、さまざまな取り組みを実施していきたいと思っています。

# INFORMATION

## 人権文化まちづくり講座

### “聴く”ことの持つ力と子どものエンパワメント

日時：5月8日（土）14時～16時

講師：森田ゆりさん（エンパワメント・センター主宰）

会場：とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ  
（豊中駅西側デッキ直結・エトレ豊中5階）

定員：50人（要申込・先着順）

共催：公益財団法人とよなか国際交流協会



### 映画「プリズン・サークル」

日時：6月12日（土）①10時～ ②14時～

会場：人権平和センター豊中

定員：各100人（要申込・先着順）

後援：豊中地区保護司会・豊中地区更生保護女性会・豊中地区BBS  
会・豊中地区更生保護協会・豊中地区協力雇用主会・人権擁護委員  
豊中地区委員会・豊中市人権教育推進委員協議会

### 自分と向き合う対話のチカラ

映画「プリズン・サークル」の教育プログラム開発者の藤岡淳子さんをお招きします！

日時：6月26日（土）

14時～16時

講師：藤岡淳子さん（島根あさひ社会  
復帰促進センター教育アドバイザー・一般  
社団法人もふもふネット代表理事）

会場：人権平和センター豊中

定員：40人（要申込・先着順）

**参加はすべて無料です。**

### 世代間交流事業

### 朗読鑑賞会

5月15日（土）

13時30分～15時30分

会場：人権平和センター豊中老人憩の家

定員：25人（5月14日まで要申込）  
「風の仲間」のみなさんによる朗読を鑑賞します。

---

## ○編集後記○

◇2020年度は新型コロナウイルスの影響を受け、できないことがたくさんありました。今までのあたりまえがあたりまえでなくなり戸惑うことばかりです。今のあり様をマイナスに思うだけじゃなく、今までのあり様を見直すきっかけになったと、プラスに思えるようにしていきたいです。そしてこんな時だからこそ繋がれる関係を大切に2021年度も事業を進めて行けたらいいなと思っています。また、オンライン化が急速に進みアナログの人たちには情報が伝わりにくいことがあると思います。その人達が取り残されることがないよう感度の良いアンテナを張っていたいと思いますと言いつつ、どちらかと言えば私もアナログに近い方でZoomなどでの講演会や会議など難しい事ばかりです。一つひとつ挑戦して若い人たちの負担にならないようにしていきたいものです（酒井）

◇年6回だったたまちづくり講座が、年12回に増えました。単純計算で月1回です。昨年4月と5月の講座は緊急事態宣言によって実施できませんでした。「絶対にやってくる第二波に備えてとにかく早めに事業を進めよう！」と思い、アドバイスをもらいながら必死に取り組んで、6か月で12回やり切ることができました。後にも先にももうないと思います。

◇中村さんの報告と、3人の対談を読んでいて、昨年、小学校PTAの集まりでPTA会長から差別発言を受けた時のことをふと思い出しました。とても嫌な思いをしましたが、私のしんどさに共感してくれる方が本当にたくさんいてくれ

たことに救われました。人権は「思いやり」ではないし、「差別」は「心の問題」ではありません。差別は暴力です。自分の差別発言を指摘された人は「そんなつもりはなかった」というかもしれませんが（PTA会長も言ってました）が、差別するつもりはなくてその発言は良くありません。本人から謝罪は受けましたが、なぜそのような発言をしたのか、私のような在日コリアンがなぜ日本で生まれ育って日本名を名乗って生きているのか、そういうことを今後しっかり考えてもらえたら嬉しいし、私自身も流れるように進むその場の会話に対して、笑ってごまかさず、鬼の形相にならず（子どもたちには鬼婆と言われていますが）、アサーティブに対応できるようになりたいです。

◇6月からいよいよ人権平和センターがリニューアルオープンします。リニューアルにあわせて、市民がたくさん来てくれる催しはないかなあと、無い知恵を絞っていたときに、「プリズン・サークル」の上映が思い浮かびました。自主上映が全国で実施されていますが、豊中での上映は初めてだと思います。ぜひご参加ください。◇ドコモ市民活動団体助成事業2年目の申請が無事に完了しました。助成事業の実施によって、協会と地域と学校との繋がりを改めて実感した機会です。「豊中、すごいですね！」とCAPの方に言うだけのために私が褒められている気分になりました。◇賛助会費の振込用紙を同封しております。会費の振込は強制ではありませんが、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。（森山）

# 相談窓口のご案内 (豊中市からの受託事業)

## 1. 総合生活相談

とき：火曜、木曜、土曜の9時～17時（日曜・祝日を除く）

ところ：豊中事務所（人権平和センター豊中）

電話：06-4865-3713

## 2. 人権相談

とき：月曜、水曜、金曜の9時～17時（日曜・祝日を除く）

ところ：豊中事務所（人権平和センター豊中）

電話：06-4865-3655

お気軽にご相談ください。面談での相談は予約が必要です。

●編集：発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北 3-13-7 人権平和センター豊中内

TEL：06(6841)5300 FAX：06(6841)6655

HP：<http://toyoin.secret.jp/>

E MAIL：b wz37306@nifty.com 郵便振替：00960-8-153806

螢池事務所 TEL:06(6841)2315 E MAIL:bpazk307@tcct.zaq.ne.jp



まちづくり協会  
ホームページ